

日本語の否定文における違和感の出所について

宝 島 格

要 旨

日本語の否定文の中でも、内容の一部を否定する文の容認可能性については、以前から研究がなされてきた。中でも文「この時計はパリでは買わなかった。」の容認性の低さについて論じた〔久野〕の研究はその後多くの研究を呼び起こした。本論では、こうした文の容認可能性は大変微妙であり、極めて細かな違いに影響を受けることを、具体的にどのような微細な違いがどのような違和感をもたらすかを検討することを通して示し、その上で、ある程度の大きな要因として「実現可能性」が取り上げられることを論ずる。

キーワード：否定、文否定、語句否定、全体否定、部分否定、容認可能性

1. はじめに

否定に関連する次の表現

(1) ?この時計はパリでは買わなかった。

に感ずる違和感については、様々な分析が提案されているが、必ずしも明快な成功を収めているわけではない。また、この類の文についての違和感の有無・可否の判断も、人により、あるいはその時の気分によって変化しさえする。細かい表現の差異、さらには聞き手の（あるいは話し手の）姿勢によっても、判断は左右されるため、分析においては大変微妙な違いを捉える必要がある。本論では、こうした微妙な差異が判断を分ける様子について、事例を中心に観察していきたい。

文を聞いたときの違和感がどのようにして生ずるかを脳内プロセスとして解明することは本論の目的からは外れる。しかし、著者の内省に基づけば、「話し手がどのようなつもりで（どのような姿勢・想定で）その文を発話したのか」と「その想定において自分はその表現を用いることがありうるか」を聞き手は想像し、判断しているものと思われる。字面は同じ表現に対しても、背後の想定は異なりうる。（もちろん字面だけでなく強勢の置き方によって表現に若干の差をつけることは可能である。）許容できる想定を探り当てられれば、聞き手はその文を可とするであろう。

なお、文の可否判断は、専ら著者の感じ方に基づいており、概ね従来の研究に一致しているよ

うに思われるが、一般に比べ可とする傾向が高いようである。

2. 判断の微妙さ

上記の(1)と、その変種である次の文

(2) ? この時計はパリで買わなかった。

に感じる違和感として最大のものは、以下であろう。

(3) 現にいまここにあるこの時計は、ロンドンで買ったものであり、話題となっている「購買行為」=『『この』時計を買う』は世の中に一度きりの特定の出来事である。それに対して、それに関連する「起こらなかったこと」はどれだけでも変異があり、特にその一つ(=「パリで買う」)を取り上げて否定するのは、発話行為としておかしい。なぜわざわざ「パリで(は)」と言うのか。

これは[久野]の言う「穴埋め式」文の問題点である。前提となる文脈によっては「どれだけでも変異のあるものの一つ」ではなくなり、違和感を感じなくなる場合もあるが、通常の文脈ではこの問題点が違和感の出所として最も強く意識されるであろう。

しかし一方で、同様の問題がありながら可とされる文もある。

(4) 今日(は)車(で)来(り)な(ら)な(か)っ(た)。

これは(1)(2)と同様の構造を持った文である。(1)では「この時計」について「買った」ことは前提されており(ここにあるのだから)、その行為「この時計を買った」は一回限りの出来事であり、その詳細な説明としての「パリで」を「部分的に」否定している。(4)では「今日(のこと)」について「(ここに)来た」ことは前提されており(いま話をしているのだから)、その行為「今日(ここに)来た」は一回限りの出来事であり、その詳細な説明としての「車で」を部分的に否定している。従って(1)と同様に一回限りの特定の出来事=「今日の訪問」の、詳細説明としての「交通手段」について、いろいろな候補のうちから、わざわざ起こらなかったこと(「車で」)を取り上げて否定している。にもかかわらずこれは可とされる。

これを可とする理由を[久野]は「穴埋め式ではなくマルチプル・チョイスであるから」と分析する。その用語を踏まえるならば、「パリで(は)」に入りうる正解の(肯定文となる)候補は種々さまざまで、事前(に)選択肢が絞(り)込ま(れ)ているわけではなく、多種多様な候補からわざわざ不正解である「パリ」を取り上げる理由がないのに対し、「車で」では、正解候補が事前にある程度に絞(り)込ま(れ)ており(バス、電車、徒歩、自転車など数個の候補というマルチプリシティに限定

される)、不正解のものを1つ1つ取り上げて否定することも不自然ではない、ということになるものと思われる。(但し[久野]がそのように説明しているわけではない。なお[久野]では「車で来る」あるいは「(ここに)来る」ことを、今日や昨日や明日や……に「反復して」行われる出来事であると述べ、そうした行為についてはマルチプル・チョイスが適用されるとしており、(4)を一回限りの特定の出来事であると述べているわけではない。)

しかしながら、[今仁2013]が解説するように、その分析方法は必ずしも明晰ではない。[今仁2013]では「代替集合」の考え方をを用いて、(2)と(4)の違いを説明しようとしている。そこで特に問題とされている違和感((1)(2)に対する)は、次であると考えられる。

- (5)「パリで(は)」という状況(場所)設定をしておきながら、そこでの行為の不実行を言うのは、あたかも実行可能であったかのような印象を与えるが、実際には「この時計」はロンドンにしか売っていなかったのもあって(ロンドンで買ったのだから)、「買わない」ことは選択されたことではない。つまり、「パリでも、買おうと思えば買えたのか? そうではあるまい。」

これは特に(1)のように「は」によって強調されると、より感じられることである。[今仁2013]の指摘するように、同じ文でも、前提となる文脈が「同じ時計が移動販売されており、パリでもロンドンでも買うチャンスがあった」というような場合にはこの問題点はなくなり、(1)(2)が可となる。またその場合、「パリで」の出来事を述べる態勢になっているのもあって、特定の状況(時・場所)が限定された上で、購買行為が有ったか無かったかの二者択一について発話しているのであるから、(3)の問題点もなくなるわけである。

[今仁2013]における「代替集合」による説明は、とりわけこのような「実現可能性」を問題にしているものと思われる。実現可能な候補が、「実際に実現したもの以外の候補も含んだ集合」=「代替集合」を形成し、このような集合に入っているものは「……しなかった」の類の否定文に適格となる、という考え方である。但し[今仁2013]では「実現の可能性がありえた」とは必ずしも述べておらず、考えうる候補として予測できるという意味で、「予測可能性」と呼んでいる。

実現・予測可能であるかどうかは「……しなかった」文を可とする大きな要因であると考えられるが、予測可能性の基準は明示が難しく、また必ずしも全ての文の可否判断を明快に説明できているわけではない。もちろんこれは判断自体が極めて揺らぎやすいことからそもそも困難な問題ではある。例えば正に[今仁2013]に挙げられている

- (6) (警察官であるAが、落とし物の財布を届けたBに)

A この財布は誰のだろう。松葉公園に落ちていたのですか。

B ? いいえ、松葉公園には落ちていませんでした。

について、[今仁2013]は「予測不可能であるために不可」としているが、これが予測不可能である理由は明確ではない。そこに感じる違和感は予測不可能性というよりはむしろ、

- (7) 松葉公園を見てもいないくせに、「松葉公園には落ちていなかった」と発話するのはおかしい。中央公園に落ちていたことから間接的に（論理的に）松葉公園に落ちていた可能性が否定できるに過ぎない。「見てきたようなことを言うな。」

という違和感と思われる。従って、Bが交番に到着するまでに松葉公園も通って来ていたのであれば、(6)は十分に可となるとと思われる。同様に、

- (8) (友人の落とした財布を探し回ったBが)
B 松葉公園には落ちていなかった。

と言うとき、Bが松葉公園も探したのであれば当然可であるが、もし松葉公園以外で財布を見つけた結果として(8)を間接的に得たのであれば、不可である可能性が高いと思われる。これは搜索場所としての松葉公園が十分に予測可能であったとしても、である。

このように、判断を分ける要因には、極めて微妙な状況の違いがありうる。例えば、(4)のように、今ここにいる私が、正にこの来訪の交通手段について述べる場合には可となるが、

- (9) (テレビ番組に出演したタレントが、近日公開の映画の宣伝に来たのか、と問われて)
a 今日は宣伝に来たのではない。
b * 今日は宣伝には来なかった。

のように、来訪の目的について述べる場合にはbは不可となる可能性が高い。現に来訪しているのだがその目的についてのみ否定する場合には、aを用いざるを得ない。次の

- (10) a 今日はここに、謝罪に来たのではない。
b * 今日はここに、謝罪には来なかった。

も同様である。

しかし目的ではなく服装に関する

- (11) a ? 今日はスーツで来たのではない。
b 今日はスーツで（は）来なかった。

ではむしろ「……のではない」文の方が違和感を感じやすい。aに対しては、「見れば分かる」ことについてことさらに説明を加えたがっているような違和感を受ける。服装については聞き手の予測不可能（おそらく）な

- (12) a 今日はハイパーメタルラグジャリーで来たのではない。
b 今日はハイパーメタルラグジャリーで（は）来なかった。

においても（ハイパーメタル何とやらが何なのか分からないにしても）可となる。この場合は逆に、aも「ハイパー……」なる語を知らない人に対する、語の説明ということで意味を成す。

同様に、服装以外の態様を述べる

- (13) a 今日は道具持参で来たのではない。
b 今日は道具持参で（は）来なかった。

においても何ら不自然なところはない。従って、「目的」と「服装などの態様」を分かť何らかの要因が存在していることになる。

更に、「現に今ここにいる来訪」ではなく、「既に済んでしまっている来訪」について述べる場合には、目的についても許容の余地があるように思われる。

- (14) (昨日の彼の来訪について)
a 昨日は、彼は謝罪に来たのではない。
b 昨日は、彼は謝罪には来なかった。定例報告に来ただけだった。

こうして見ると、外部から明確に見て取れる、到着時点ではっきりと決定してしまっている「交通手段」「服装などの態様」については「……しなかった」文が可となるが、来訪全体（到着そして滞在）の意味・意義の「解釈」が問われる「目的」については、来訪が全体として未完了な時点では不可になりやすいという分類ができそうである。そうすると、(9) (10) においては、

- (15) 「宣伝（謝罪）には来なかった」という発話は、来訪の目的（来訪全体に対して意味づけられる）を述べることで来訪全体を完了したものと捉えていることを明らかにしており、進行中の来訪を述べるには不適切ではないのか。

という違和感を感じている可能性が高い。(4) (11) (12) (13) は発話の時点で既に来訪全体に対する交通手段・服装・態様が定まっているため（滞在中に変化することはない）か、あるいは、来訪全体ではなく到着までのこと（滞在を含まない）を限定的に「来た」と述べているためか、違和感が生じない。

こうした観点からすると、(4) はかなり特殊な状況を含んでいる例であると言える。まず自分の来訪について述べているため、来訪自体は成立している。そして「来た」が現在進行中の来訪を指している。また部分的に否定されているのが、来訪に付随する性質の内、交通手段という、外部から明らかに確認でき到着時点で確定している性質である。

従って、「自分が来た」ことではなく、他人、あるいは「行った」こと、あるいは過去形ではない場合も考えれば、微妙な状況の違う事例がさまざまに見つかる。

(16) 今日はそこ（テレビ番組）に宣伝には行かなかった。トークをしに行っただけだ。

においては、「行った」という行為の性質上、訪問は完了したものとみなされているため、特に違和感は感じられない。また未来のこととして

(17) (謝罪すべき彼が、ここに来るだろうかと問われて)

鉄面皮な奴だから、来るだろう。だが、謝罪には来ないよ。

と言うのも可であろうし、次のように「来た」と完了した形でない場合にも可となるものと思われる。

(18) (テレビ番組でタレントが、映画の宣伝のために出演しに来た場合は、危ないゲームをする決まりだと聞かされて)

えーっ ホントですかあー？ よかったあ、宣伝に来なくて。

(19) A 否定してるけど、ホントは宣伝に来たんでしょ。はい、30秒差し上げます！

B だから、宣伝には来てません！

後者(19)においては「宣伝のために来ている」という「状態」を述べているので、来訪の行為全体の完了を含意しているとみなされることがない。

このように、判断の可否は大変微妙な要因に左右されやすく、また判断も揺れる（著者の判断は一般よりかなり「可」に偏っている可能性もある）。従って、もし「実現・予測可能性」のような単一の要因によって「……しなかった」文の違和感を説明することが可能であるならば、理論的には大変明快で好ましいことではあるが、果たしてそれが可能であるかには疑問が残る。

とはいえ、(5) のように、実現可能であるか否かは、違和感の出所として大きな要因である。次節ではこれについて見てみたい。

3. 採用できる選択肢

[今仁2013]の提案する「予測可能性」は重要な点を指摘していると思われるが、しかし、可否判断がある程度微妙な発話においては、「そこに現れる語句とその代替語句という選択肢が、予測可能であるか否か」ではなく、むしろ「肯定文に実現の可能性はあるか」が重要であると思われる。次の例では、[今仁2013]のいう「予測可能性」では、その判定に曖昧さが残る印象が否めない。(これは正に[今仁2013]において[久野]の分析を修正している例である。)

(20) *僕は終戦の年に(は)生まれなかった。

[久野]は(1)(2)に対すると同様に、これを「穴埋め式」の否定文として不可とする。その違和感の出所として意図されているのは(3)ではないかと思われるのだが、[今仁2013]においてはこれを代替集合の予測不可能性として分析している。

即ち、「終戦の年」の部分に入る、つまりは「生まれ年」の集合が代替集合となるわけであるが、それが文脈の中で予測可能なもので構成できなければ、文は不可となる、という分析である。通常の文脈では特別「終戦の年」を取り上げる必要もありえず、予測という観点からは代替集合が形成され得ない(ので不可となる)と[今仁2013]は説明する。逆にクイズや、何らかの期待の下では、クイズの解答選択肢や、期待される選択肢によって代替集合が形成され、文が可となるという。

しかし、それならば元々の[久野]の例文

(21) A 君は、終戦の年に生まれたのか。(「終戦の年に」を強調)

B ?いや、終戦の年には、生まれなかった。

のAの質問によって既に予測可能性は満たされている(少なくとも「終戦の年(1945年)」は選択肢として予測できていた)と考えるのが自然である。[今仁2013]は「状況の中で予測可能であること」を重視しているが、「終戦の年」の代替となりうる集合は「年(年号)」や「ある程度細かく区切った時代区分(戦前、戦時中、終戦時、戦後)」であることは自然に前提されていることであり、明示されていなくとも予測可能であるとするのが自然ではないか。

もちろん[今仁2013]においては、(21)のような文脈が与えられればBの返答は可であるとするとも考えられ、分析が破綻しているとは言い切れない。しかし、この例から感じられるのは「予測可能な代替年号が形成できるか」ではなく、「正にその年が肯定されうるか」が問題となっているということである。即ち、「肯定文が実現可能であったか否か」だけが問題であって、「他の選択肢の集合」は特に役割を果たしていないように感じられる。(但しもちろん(21)で「終戦の年の代替となりうるのが年号である(金額とか場所とかではなく)」などの、極めて基本的な前提は、文の理解・判断において当然ながら要求される。)

「実現可能性」もまた、何を以て可能とするかの基準が曖昧であるのは確かである。しかし以下の例を見ると、ある程度の現実感を以てそれが定義できそうな様子はある。

(22) (ある画家の作品について)

- a この作品は、1945年には完成しなかった。明けた1946年によりやく完成した。
- b * この作品は、1945年には完成しなかった。1944年に完成してしまっていたからだ。
- c * この作品は、1945年には完成しなかった。そもそも彼が生まれる前だったし。

この例が示しているのは、aが可となるのは正に1945年のその時点で、完成するかどうかどちらにも十分にありえたもの（と話し手が考えている）からだ、ということである。「完成する」という（否定を除去した）肯定文の行為・事件が、実現可能であったため、残念ながら不成立に終わったことを「……しなかった」文で表現できるのである。

bのように、1944年に既に完成してしまっていたならば、そもそも1945年のその時点で「完成する」行為・事件は論理的に実現不可能である。これが実現不可能性の一つの形と言える。bをクイズのように無理に解釈し直すことは不可能ではないが、かなり無理があり、「否定文の論理的意味合いを悪用した」言い訳のような文だと感じられる。(bを、「1944年以前の年号から成る代替集合のみが予測可能」として「予測可能性」的に分析することはもちろん可能であるが、それは結局のところ「1945年での実現可能性」だけが要点であると言っているように感じられる。)

同じ(22)でも、1945年の完成間近の状況を臨場感をもって捉えるのではなく、離れた時点から全体として静的に捉えて述べる場合には、aにも(1)や(2)のような違和感が感じられるであろう。即ち、このような文における「実現可能性」は「正にその場において」採用されえた選択肢であるか否かを、問題としているようである。

(1) または(2)の例(以下に再掲)が、「実現可能性」によって説明されるのは既に(5)で述べたことである。

(23) (ロンドンで買った今ここにある時計を見ながら)

？この時計は、パリで(は)買わなかった。

一方、「一度きりの出来事」という性質において(23)と全く違いのない次の文

(24) (旅行前に、どこかで売り払うことに決まっていた時計について)

あの時計は、パリで(は)売らなかった。

は、全く違和感のない文である。(23)と(24)の違いは、(ロンドンで買ったからには時計はパ

リでは売っていなかったのであって) 話し手がパリという場で、購買という選択肢を自由に採用することができないのに対し、「売る」ことは話し手の選択にまかされており、パリという場でも販売を採用可能だったからである。「売る」ことについても、どこかで売ってしまったら旅行のその後の行程においては販売は選択不可能なので、旅行を時系列でとらえていることが明示された

(25) *あの時計は、マドリッドで売った。だからその後に行ったパリでは売らなかった。

は不可となる。しかし、旅行を時系列ではなく全体として捉えて、事前にどの場所を選択するかが検討され、事後にその実施結果を述べているような文脈で捉えるならば、そうした違和感はない。

「生まれる」文についても、同じような意味で採用可能な選択肢であったならば、文は可となる。同様の例は〔今仁2013〕でも取り上げられている。

(26) (1979年の12月末に生まれそうだった子供が、結局は年明けに生まれて)

さとみは、1979年には生まれなかった。

これは話し手が能動的に選択することではないが、臨場感をもってその場面描写を捉えるときに、採用されえた(話し手によって、ではない) 選択肢と言える。

「実現可能性」即ち「選択肢としてその場で採用できたかどうか」は、文脈によって微妙に異なるものであろう。例えば

(27) a * この写真は、パリで(は)撮らなかった。

b この写真は、夜景モードでは撮らなかった。

c この写真は、緑山スタジオでは撮らなかった。

d ? この写真は、きれいに撮らなかった。

e この写真は、きれいに撮れなかった。

において、aについては、「もしパリで撮ったとしたらこの写真ではなくて別の写真になっている」という点で、その写真には撮影地(おそらくロンドン)が分かちがたく結びついている。このためパリでの撮影は選択不可能であったため、不可となる。一方のbは、「もし違うモードで撮っていたらこの写真ではなかったはず」という性質は実はaと同じなのだが、撮影モードの違いは写真のアイデンティティにさほど結びついているとは感じられず、別のモードでも「この写真」=「パリで、この時にこの景色を記録したもの」であると捉えられる(写真は機能や意味・意義によって捉えられているとも言える)ため、撮影時点での選択肢として夜景モードも採用可能だったと言える。cは前提されている文脈が雑誌などに載せる写真であることが窺える。その

写真で伝えたい内容が変わらなければ「この写真」と言いやすい状況であり、撮影地の違いではあるが、撮影モード同様の扱いを受けると考えられる。d, eは結果としての写真の出来栄えを取り上げている。dの違和感は、能動的な「撮らない」に対するものである（「わざと汚く撮った」ことを言うならば違和感はない）。一方eは受動的に述べており、撮影の際に、きれいに撮れることを期待していた様子を思えば、ありえた選択肢と言える。

同様の微妙な文脈の違いが、(23)にも考えられる。(23)における「購入地」を購買行為にまつわる他の性質に変更してみよう。

- (28) a この時計は、カードでは買わなかった。
b この時計は、免税店では買わなかった。
c この時計は、定価では買わなかった。

これらはいずれも可となるものと思われる。更に、(23) そのものも、文脈をかなり限定して

- (29) (パリ・ロンドン・マドリッドを順に観光旅行してきた話し手が、ロンドンで買った時計について問われ)
A これ、いい買い物をしたね。パリで買ったの？
B ? いや、この時計は、パリでは買わなかった。次のロンドンで買ったんだ。

においては、(?を付してはいるが) 可にかなり近いと思われる。旅行全体を一体として捉え、それに付随する「お土産購入」という行為の、一つの性質として「パリかロンドンか」を取り上げるならば、(28) 同様に可とすることが可能となるであろう（但し、「パリでは」と「は」がおそらく必要である）。従って、

- (30) (パリ・ロンドン・マドリッドを順に観光旅行してきた話し手が、この旅行で買ったのではない時計について誤って問われ)
A これ、いい買い物をしたね。パリで買ったの？
B * いや、この時計は、パリでは買わなかった。前にキンシャサで買ったんだ。

は不可となるように思われる。

このように、「……しなかった」文において部分的に否定されている項目が、行為の正に行われるその場で採用されえた（肯定文が実現可能であった）と捉えられるならば、文は可と判断される可能性が高いと考えられる。行為のその場で採用することが不可能であるならば、文が不可とされる可能性が高い。

「パリで」などの項目に入りうる他の可能性は、もちろんその項目と同等の、例えば「パリで」

という項目ならば「場所」でなければならないということは、暗黙のうちに当然理解されていることであり、そうした可能性＝選択肢が「予測可能である」かどうかは、「……しなかった」文の可否に関わるものではないのではないと思われる。（「場所」以外には、例えば「時」「目的」「手段」「態様」などが考えられる。）

しかし、実際の文においては、既に述べたように細かい言い回しの違いが影響を与える上に、影響の与え方も大変微妙である。次節では、「は」の影響について観察してみたい。

4. 「は」の影響

助詞「は」の使用は、主題の提示・他との対比という影響を与える。（1）と（2）の違いは「は」の有無であるが、それに特殊な文脈を追加した（29）においても、判断が可となるには「は」が欠かせないようである。「は」をつけない（2）（以下に再掲）は、文脈を追加してもかなり容認可能性は低く、以下では「？」ではなく「＊」を付してある。

（31）＊この時計はパリで買わなかった。

後述のように、「この時計」を買った場所が一か所であるならば（もちろんそうなのだが）、それを肯定文で表現する際には「は」は用いられない。

（32） a この時計はロンドンで買った。

 b ＊ この時計はロンドンでは買った。

日常的にこうした使い分けをしている結果、「は」のない（31）のような表現は「買った場所」を示すものであり、そこにわざわざ「買っていない場所」（どれだけでも変異がある）を入れて表現するのは（3）に述べたようにおかしく感じられる。

一方（1）（以下に再掲）の場合、「は」を付すことによる影響が生じ、それによりある文脈では可となる可能性も出てくることは、（29）で述べたとおりである。

（33）？この時計はパリでは買わなかった。

本節では、「は」を付すことによる影響を、対比を中心に見ていきたい。なお、明示的に「は」が用いられていなくとも、同様に機能する表現もありうる（字面ではなく口調で強調するなどもありうる）。

「は」は主題を提示する役割を果たすが、その意識が特に強くなると、「他のものではない、こ

れについて述べる」ことから、「他のものでは見られない性質」「他のものに比べて際立った特徴」を述べることになる。これが対比である。更にこれが進むと、「他のものについては関知しないが、これについてはこういう性質である」「これについてはこういう性質であるが、その事実はこのものの性質には関係しない」というニュアンスを帯びると考えられる。但し、素朴な主題の提示と、こうした対比とは、区別しづらい面もある。

次の文

- (34) 時計を、パリでは買わなかった。ロンドンでは買った。マドリッドでは買った。ローマでは買った。

においては、各場所での購買行為の有無が対比されている。行為が有る場所と無い場所があれば、「は」によって対比が可能である。(従って、対比される候補が2つに限定される場合には、一方では「有」、他方では「無」となる必要がある。但しこれも以下のように必ずしも有無両方の可能性が要求されるとは限らない。)

単独の候補にのみ言及した

- (35) 時計を、パリでは買わなかった。

は、「パリでは行為は無かったが、パリ以外の候補では有無は両様ありうるだろう、だが今それについては述べることもしない私は関知しない」という話し手の姿勢を印象付け、それが「パリでは無だったが、他の場所のことは知らない」もっと言えば「パリで無であることは他の場所の有無に影響を与えない」という事実をも印象付けることになる。

従って、行為が1か所のみで「有」となる文脈では、その場所での「有」によって他の場所での「無」が確定することになり、「は」を用いることができなくなる。(32) (以下に再掲) の

- (36) a この時計はロンドンで買った。
b * この時計はロンドンでは買った。

では、こうした事情がbを不可とさせている。つまり、bを聞くとき「ではパリかどこか他の所でも買ったのか？」と感じられるわけである。

「有」が1か所に限定されず

- (37) a 3つあったこの商品を、パリでは売らなかった。ロンドンでは売った。マドリッドでも売った。最後の1つを、ローマで売った。
b * 3つあったこの商品を、パリでは売らなかった。ロンドンでは売った。マドリッドでも売った。最後の1つを、ローマでは売った。

のような場合でも、他に影響を与えるか否かで「は」の可否を判断できる。この商品の場合、最後の1つ以外は、「有」を「は」で言うことが可能である。もちろん「無」では「は」は可能である。（更に言うと、「無」が1か所に限定されている特殊な文脈がある場合、「無」を「は」で言うことが不可になる。但しこれには相当文脈を意識しなければならない。）

これについて更に大変微妙な可否判断であるが、候補の順序が影響を与えることがある。唯一の「この時計」が移動販売されたという〔今仁2013〕の設定を例にとると、購買行為はロンドンか所で生じたのであるが、

- (38) (ベルリン、パリ、ロンドンの3か所をこの順に移動販売された高価な時計について)
この時計は、ベルリンでは買わなかった。だが魅力を感じた。パリでも買わなかった。
そしてとうとう、ロンドンでは買った。我慢しきれなかったのだ。

とすることが可能である。全ての候補が挙げられ、最後に「有」の候補（他に影響を与える）が述べられているので、上記の不具合を回避しているためであるのかもしれない。

「は」はこのように、強い対比の意識をもって捉えられることがあるが、その場合、候補に入れ替えられる項目以外は固定されるのが普通である。対比されている項目を入れ替えたものが、即ち〔今仁2013〕で説明されている「代替集合」を成す。

どの項目に様々な候補を考えるのか、つまり入れ替える項目はどれか（それ以外の項目は固定する）は、文脈、話し方等々にもよるが、語順にも影響される。次の例

- (39) a パリでは、ルーブル美術館には行かなかった。
b ? ロンドンでは、ルーブル美術館には行かなかった。
c パリでは、ルーブル美術館には行った。
d * ルーブル美術館には、パリでは行かなかった。
e * ルーブル美術館には、ロンドンでは行かなかった。
f * ルーブル美術館には、パリでは行った。

のa～cのように、場所がまず提示され、聞き手が情景を想像した状態で行き先が「は」によって取り上げられれば、ルーブル美術館と他の行き先とが対比されていると捉えられやすい。そのため、aやcを言うことができる。bは、ロンドンには選択肢としてルーブル美術館が存在しえないので、不可とする感じ方もあるが、「当然行ける訳もない」として述べられていると思えば、可とすることも可能かもしれない。

一方、d～fにおいては、ルーブル美術館が主題として提示され、対比される候補が「都市」であると捉えられやすい。この場合、dやfのように言われると「パリでは行った（行かなかった）」と言うなら、ロンドンでも行ったり行かなかったりの選択ができるのか？」と感じられ、違和感

が生ずる。eはもちろん選択肢としてありえないものがあたかも選択できるかのように言われており、実現可能性に問題がある。

但しいずれの場合も、話し手が語順を入れ替えて発話しているだけであると（何とか無理をして）捉えるならば、可とすることもできる。

5. 結合した語句

「……しなかった」文においては、主たる述語に、意味に限定を加えるいくつかの語が付随していることから問題が起こる。これが単一の語から成る述語であれば、単に否定されるだけである。

- (40) a 態度は軟化しなかった。
b 態度は柔らかくは変化しなかった。
c 態度は柔らかく変化したのではない。

bにおいては、変化そのものが否定されているわけではなく、もし対比が強く印象付けられるならば、むしろ変化した（硬化した）ことをほのめかす結果となる。一方でaは中立的に、「柔らかく変化する」ことのみを否定しており、変化の有無の印象付けにそこまでの影響はない。ついであるが、cのように「……したのではない」文に取り替えると、aとはまた違う、「解釈している」ような印象を与える。

従って、いくつかの語が強く結合して一語のように扱われる場合、これまで述べてきたような部分的な否定にまつわる微妙な問題は生じない。（但し、今度は「一語のように扱われるか否か」の判断が文脈等々によって微妙に揺れるので、結局微妙な判断となることは避けられない。）例えば

- (41) (Aが買い物に行ったBのことを心配している：この旅行で、手持ちの現金が少なくなっているから、現金じゃなくなてなるべくカードで支払おう、とこの前も確認し合っただが、どうもそういうことをBは忘れてしまうから心配だ……。そしてBが帰ってきた)
A お帰り。お前、現金使わないでちゃんとカードで買って来たろうな？
a B え？……あしまった！ この時計はカードで（は）買わなかった。
b * B え？……あしまった！ この時計はカードで買ったのではない。

においては、「カードで」買うことが重要な意味を持っており、aでは「カードで買う」が一語のように扱われている。この場合、否定によって否定されているのはカードでの購入であり、購入そのものは当然ながら否定されていない。

またこうした場合、「カードで」がそのまま使用でき、「カードでは」と「は」を付加する必要

はない。多少強調する感じで「は」を付加することは問題ない。

なおBがbの応答をしたとすれば、かなり奇異に感じられる。それは、この状況であまりに冷静に事態を分析しているかのようだからである。後に見るように、「……したのではない」という「命題否定文(メタ否定文)」は、事態を分析的に捉え解釈する印象を与え、単なる命題否定(「この時計をカードで買った」は事実ではない、という)とは異なる意味が持たされる。言ってみれば、(直接的に出来事を描写する)aの「カードで買わなかった」ことの結果、bの「カードで買ったのではない」が結論付けられる、ということである。

同じような例は、文脈を工夫すれば色々作ることができる。

- (42) (Aは、Bが旅行に行くので、ある特殊効果を狙った面白写真を、ぜひ「花の都パリ」で撮ってきてほしいと言っていた。それをウェブにのせる際に、「パリで撮った」とぜひ書きたいので、どうしても撮影場所はパリでなければならないのだが、写真自体を見てもどこで撮ったかはわからないような面白写真である。Aは旅行から帰ってきたBから写真を受け取り、問題の面白写真を見つけて問う。)

A この写真、パリで撮ったんだよね？

a B あっしまった！ それは、パリで撮らなかった！ 忘れてた！

b ? B あっしまった！ それは、パリで撮ったのではない！

bは直接的な失敗感情の表出としては奇妙だが、旅行から時間も経っていることを考えると、「……ごめん。それ、パリで撮ったのではないんだ。」のように一呼吸おいて分析的に後悔・謝罪の念を表しているとするなら、可能であろう。

上の例は常態化していない語句結合を作るために、「しまった！」と言いたくなるような、自然と言葉がほとぼしり出る状況設定を用いている。そのような状況で(41)(42)のようにaの「……しなかった」文の方が適切に感じられるのは、事態の描写としてaの方がbよりも基本的・本質的であることを示しているように思われる。

さて結合した語句に、特に「は」を付加して強調・対比を印象付けたい場合には、結合した語句のいろいろな所に「は」が付きうるが、普通には動詞の直前の語に付くものと思われる。次の

- (43) (今回のドイツ旅行について述べて)

a 残念ながら、ビールをジョッキでは飲まなかった。

b 残念ながら、ビールはジョッキで飲まなかった。

c 残念ながら、ビールはジョッキでは飲まなかった。

d 残念ながら、ビールをジョッキで飲みはしなかった。

では、(本場ドイツならば、ぜひやって見たいこととして)「ビールをジョッキで飲む」という、結合語句で表された行為について、不実施を述べている。dがこの意味を最も正しく伝える表現であろうが、普通はaを用いるのではないかと思われる。但し、aは特に「ジョッキ」に焦点を当てているという理解も可能であり、dに比べて曖昧性は残る。

この種の例として更に(欧州旅行でやって見たいこととして)「ドイツでビールをジョッキで飲む」までを一体とみなす文脈、あるいは「パリでブランドバッグをカリスマ店員から現金で買う」などという(成金趣味の行為としてはどの条件も外せない)結合語句を使用する文脈も、考えうる。従って、「パリで買う」が結合した語句として捉えられる文脈、例えば

- (44) (パリで買うことが、後々の自慢の仕方に大きく影響することを前提として)
このバッグはパリで(は)買わなかった。

では、判断は可となりやすいであろう。もちろん「パリで買う」と「ロンドン他で買う」とが天と地との開きがあるときに、場所の差異が重要であることを特に対比するためには「は」を挿入するのがより自然と思われる。(バッグでなく時計であれば、パリでなくスイスを用いた例文にすると現実的であろう。)

このように、語句の結合によって容易に自然な「部分的否定」を考えうるので、こうした文脈に慣れてしまうと、そもそもの(1)などが、それほど不具合な文とは感じられなくもなる。(従って、不可となる文は結合が相当弱い語句から成っているとも言える。)

文法的にも一体のものとして扱われるような語句もあり、例えば

- (45) a 今日(は)道具を持って来なかった。
b 今日(は)道具を持参せずに来た。
c * 今日(は)道具を持って来ずに来た。

における「持って来る」は、普通は一体と捉えるのが自然な結合語句である。しかし「持って来る」が「持参する」と同等の一語であると捉えるならば、b同様にcも可となるべきであるが、これは不可と判断されるのであって、然らばaでも「持って」と「来る」はある程度分離していると見ることができる。つまり、aは「パリで買う」を部分的に否定するのと同様、「持って来る」を部分的に否定している(来るには来たので)のであり、「パリで買わなかった」が通常不可なのに「持って来なかった」が自然に可となるのは、結合の強さの違いによるのである(と思われる)。

6. 能動性, その他

能動的な行為かどうか、**「……しなかった」**文の可否判断に影響を与える。前述のように、その場面での選択肢の採用可能性が問題となるので、とりわけ能動的な行為においては、動作主が主体的に行為を実施できたかが問題となる。

- (46) a ?さとみは1979年には生まれなかった。
b (母親の言葉：) ももこを1979年の年初に産んでいて、同じ年に次の子を産むのは嫌だった。だから、予定日は年末だったけれど、さとみは1979年には産まなかった。
c (母親の言葉：) ももこは、日曜日に産んでしまったせいで、何かと都合が悪かった。だから、さとみは日曜日には産まなかった。

のaは既に述べたように、1979年末のその時その場で臨場感をもって見守っていることを説明しているのであれば可となるが、単に中立的に述べるには唐突である。これに対してbはより能動的に、産む時期を母親がコントロールしているような印象を与え（そのように捉えるならば）、「産む」行為が採用可能な選択肢として現実味を帯びていたことが匂わされるため、可となる可能性が高いと思われる。（更により自然な文脈として出産コントロールができていそうなのがcである。）同様に「作品が完成した」と「作品を完成させた」とでは、後者の方がより「意図」を感じさせ、選択肢の採否が話し手に握られていた印象を与えるため、容認可能性がより上がるように思われる。

- (47) a この作品は1945年には完成しなかった。
b (私は) この作品は1945年には完成させなかった。

状態を述べる場合に比べ、能動的な語は、選択肢を採用するか否かを積極的に決めるという印象を与える。次の例

- (48) (松葉公園から中央公園に歩いて行く中で財布をなくしたBが、松葉公園までは確かに財布を持っていたことに基づいて、Aの問いに答えて)
A お前、どこで落としたんだ。松葉公園か。
a B いや、松葉公園で落としたのではない。
b B いや、松葉公園では落としていなかった。
c ? B いや、松葉公園では落とさなかった。

では、aが最も普通であり、冷静に振り返って分析している印象を与えるが、bのように表現す

ると、その場における臨場感をもって経過状況を説明する（「松葉公園では、まだ落としていなかった」）印象を与える。一方cでは、同じく経過説明のように捉えようとする、「落とす」が能動的であるせいで無理が生ずる（わざわざ落とすか否かを選択したわけではない）。cが可能となるのは後から振り返って、「結果として」そこでは落とさなかったと言える、という分析によってであり、「落とす」の能動性を取り去った捉え方によってである。（綱渡りのように「落とすまい落とすまい」と注意しながら松葉公園を通過したのであるなら、別であるが。）

次に、「採用されうる選択肢」という点に「期待」の与える影響を見てみたい。次の例は、(1)あるいは(30)と同様の不具合をもっている。

- (49) A この時計、いい時計ね。パリで売っていたの？
 a * B いや、この時計はパリでは売っていなかった。ロンドンで売っていたんだ。
 b B いや、この時計はパリで売っていたんじゃない。ロンドンで売っていたんだ。

「この唯一の時計」について、事前に何の期待もなく、（実際売られていない）パリでの販売が選択肢として提示されることはありえなかったのであり、不可と判断される。これは「唯一の時計」であることが理由ではない。意図や期待をもってパリに滞在するならば、

- (50) 世界に一つのこの時計は、欧州にあったのだが、前から何とか手に入れたかったものだ。
 幸い今回欧州旅行に行くことになったので、ぜひ買って帰ろうと思っていた。欧州の
 どこで売っているかは明確ではなかったので、パリで所在を探したが、残念ながらパ
 リでは売っていなかった。その後にロンドンに回ったら、うれしいことにロンドンで
 売っていた。だからそこで買った。

におけるように可となる。「唯一の時計」の販売地は一か所に限られるが、(50)の可否判断と「同種の商品で各地で販売しているもの」の場合とは何ら変わるものではない。

- (51) このゲームソフトはパリでは売っていなかった。ロンドンでは売っていた。

これら(50)および(51)における「売っていなかった」は、「パリという場所(およびその日その時)」と「時計あるいはゲームソフト」という場面設定について、その場所でその対象が「売られていない」状況にあることを述べており、不可とすべきことは何もない。(49)と(50)の違いは、売られていないその「時計」がその場面に登場することが妥当かどうかであり、(49)ではパリにその時計を登場させることが極めて唐突（(3)に言うように）であるのに対し、(50)では元々の期待のせいで、全く自然である。

7. 「……したのではない」

「……したのではない」は、命題否定（メタ否定）がその原義であるかもしれないが、聞き手に与える印象は単なる命題否定（メタ否定）ではない。それはごく普通の文をこれによって否定してみれば分かる。

- (52) a ご飯を食べた。
b ご飯を食べなかった。
c ご飯を食べたのではない。

cは単にa「ご飯を食べた」という命題を否定したというよりは、何かをしでかして、それに対する説明として「ご飯を食べたというのは当たらない」と言っていると捉えられる。つまり、「ご飯を食べた」に類する何かが存在していることを、積極的に含意しているような印象を与える。

「……したのではない」という表現を使用することは、その論理的言明っぽい構造から、「何かに対する説明をする」という（言語を使用した）行為としての意味合いを持つことになり、そのため説明されるべき存在（実体物や、出来事など）が前提されていると暗に捉えられ、その結果このような印象を与えることになるのであろう。

特に、この表現は、説明されるべき存在の表面的な見た目（すぐ分かる）よりは、その存在の「価値」や「意味するところ」といった、「解釈」に依存する内容について用いられやすい。

このように、「……したのではない」表現においては、「正しくは……したのだ」という、代替として用いられるべき表現が想定されていることになる。(52)であれば、「ご飯」ではなく「デザート」であるとか、あるいは「ご飯を食べた」ではなく「冷蔵庫を整理した」であるとかになる。どの範囲を代替すべきかは、話し手が意図することである。次の

- (53) パリでブティックに行ったのではない。

では、「は」を適宜付加することによって）代替すべき範囲として「行った」「ブティック」「ブティックに行った」「パリ」等々が考えられるが、最も広く取れば「パリでブティックに行った」全体をも他の表現で代替しうる。その場合「これほどお金を使ってしまった行動」が「パリでブティックに行く」か「ロンドンで競馬に行く」か等々だったのであろう。そのような捉え方は、前述の「語句の結合」に関しても見られるものである。

さて「解釈」という印象を与えやすいことから、

- (54) (遅刻してきた本人が反省の言葉を述べて)

- a 今日は時間通りに（は）来ませんでした。自覚すべきことと思っています。
b * 今日は時間通りに来たものではありません。自覚すべきことと思っています。

のbのように言うことはまずありえない。まず他人事過ぎる言い方であること、そして何か言い訳となる別の解釈があるかのように聞こえることが、問題である。従って、aの表現はもちろん可であるだけでなく、言い換え不可能な、なくてはならない表現である。

「……したのではない」表現は、(1)のような描写については言い換えとして有効であるが、(52)のような描写については言い換え以上の内容を表してしまう。(1)の発せられる文脈は、そもそも出来事自体は存在（生起）しており、その性質（購入場所など）についての説明を行うというものであるため、「……したのではない」表現による特別な印象が問題にならない。（しかも(1)では(54)のような「解釈」問題も起こりづらい。）しかし(52)のような、生起の有無自体が問題となる文脈においては、存在が暗に仮定されてしまう「……したのではない」表現では本来とは異なる内容を表してしまう。(4)のような表現では、「今日の私の来訪」は、ここに私がいるからには（だから発話している）確実に存在している。従って、(4)を言い換えた

(55) 今日車では来たのではない。

は(4)と同じ内容を表すのである。一方、(4)に似ているが

- (56) (ある景勝地に、ぜひ車で遊びに行ってみたら、と言われていた直後の日曜が昨日だったのだが、結局どうしたかといえば)
a 昨日は車で行かなかった。
b 昨日は車で行ったのではない。

においては、aは「そこに全く行かなかった」場合も含みうる（「車で行く」を一体と捉えることは可能である）のに対し、bは「車では行かなかったが電車か何かでは行った」という解釈が強い。これは「来た」と「行った」の、実は大きな違いである。

但し、(1)の言い換えである

(57) この時計はパリで買ったのではない。

も、前述の通り、どの範囲を代替するかは、話し手の意図によって変わる。通常は「パリで」を代替し、(1)と同じ内容を表すと考えられるが、「パリで買った」を代替し、正しくは「ロンドンでもらった」であるかもしれない。その場合、(1)とは異なる内容を表すことになる。

8. おわりに

本論で見てきたように、「……した」を単純に否定した「……しなかった」は、その内容、細かな語の差異、文脈によって、可にも不可にもなり、大変微妙で判断しづらい容認可能性を見せる。(一方で、よく代替表現として単純に用いられる「……したのではない」も、実はそのまま使用できないことが多いことも見た。) それでも、「……しなかった」文の容認可能性は、特に臨場感をもって表現されていると捉える際に、選択肢として採用されえたか(=実現可能であったか)に大きく依存しているように思われる。この「臨場感」については文の字面だけや、あるいは抑揚などを付加したとしても、必ずしも明示できるわけではない。聞き手がどのような姿勢でその発話を聞くかによって、判断は変わる。従って客観的に可否判断を行うためには、かなり限定的な文脈を構成し、聞き手の姿勢を限定することが必要となるであろう。

本論では専ら平叙文過去形の「……しなかった」文を取り上げ、それ以外の形については殆ど検討していない。これはこの問題の出発点が「過去一回限りの特定の出来事」を問題としていたためである。他の形も含めた、広い事例を検討することによって、より本質的な原理を見出すことが、今後の課題となろう。

付記

本論文の執筆にあたって、今仁生美氏から多くの助言と示唆を頂いた。ここに記して謝意を表したい。

参考文献

Horn, Laurence. (1989) *A Natural History of Negation*. Chicago: University of Chicago Press.

今仁生美 (1993) 「否定量化文を前件にもつ条件文について」『日本語の条件表現』益岡隆志編 pp203-221. くろしお出版

今仁生美 (2013) 「日本語における否定と焦点の関係について」名古屋学院大学論集 言語・文化篇 第24巻 第2号 pp. 243-259

片岡喜代子 (2006) 『日本語否定文の構造：かき混ぜ構文と否定呼応表現』くろしお出版

Kato, Yasuhiko. (1986) *Negative Sentences in Japanese*, Sophia Linguistica XIX, Sophia University.

加藤泰彦 (2003) 「否定のスコープと量化」『朝倉日本語講座5 (文法-I)』北原保雄 (編) 朝倉書店

金英敏「日本語における否定文の指導に関する一考察」

eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/bitstream/.../1/13_p1-52.pdf

工藤真由美 (2000) 「否定の表現」金水敏・工藤真由美・沼田善子著『時・否定と取り立て』pp. 95-150. 岩波書店

久野暲 (1983) 『新日本文法研究』大修館書店

小林ミナ (1993) 「疑問文と質問に関する語用論的考察」『言語研究』164. pp. 128-156. 日本言語学会

- 鄭夏俊（1995）「日本語の否定辞「ない」の意味と用法」『国語学研究と資料』19. pp1-15. 国語学研究と資料の会 早稲田大学
- 益岡隆志（1991）『モダリティの文法』くろしお出版.
- 益岡隆志（2004）「日本語の2つの否定型の意味」『言語研究の接点—理論と記述—』pp. 273-282. 英宝社
- Nakanishi, Kimiko. (2007) “Measurement in the nominal and verbal domains” *Linguistics and Philosophy* 30. pp. 235-276.
- 野田春美（1997）『の（だ）の機能』くろしお出版
- Takubo, Y. (1985). On the Scope of Negation and Question in Japanese. *Papers in Japanese Linguistics*, 10: pp. 87-115.
- 田窪行則（1987）「統語構造と文脈情報」『日本語学』6-5: pp. 37-48. 明治書院
- 田野村忠温（1990）『現在日本語の文法Ⅰ』和泉書院
- Yatabe, Shûichi. (1996) Negation and focusing in the grammar of Japanese. In Takao Gunji (ed.) *Studies on the Universality of Constraint-Based Phrase Structure Grammars*: pp. 217-225.